

Title	近代における「あて字」の減少過程：表音タイプを中心に
Sub Title	
Author	原科, 有里(Harashina, Yuri)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2024
Jtitle	三田國文 No.69 (2024. 12) ,p.60 (27)- 70 (17)
JaLC DOI	10.14991/002.20241200-0060
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20241200-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代における「あて字」の減少過程

——表音タイプを中心に——

原 科 有 里

1 はじめに

明治期においては、「目出度」^{め で た く}「矢張」^{や は り}などの表音的なあて字が盛んに用いられていたが、これらは現代であまり使用されない表記である。したがって、近代から現代までの間に使用されにくくなったものと考えられるが、このような「あて字」が明治期以降に減少した過程について、表記実態に基づいた調査はこれまで不十分であった。そこで本研究では、〈漢字の字義を用いず、漢字の字音や和訓だけを用いて語の音形を表記する表音表記〉を「表音タイプのあて字」と定義づけたうえで、近代で長期にわたって発行された新聞3紙を資料として、表音タイプのあて字が減少した時期や要因について調査した。

2 問題の所在

山田（1955）をはじめとする先行研究で指摘されてきたように、「あて字」という語は多義であり、指し示す対象が曖昧である。「あて字」にはきわめて雑多な表記が含まれると考えられ、その分類を試みた先行研究として、山田（1955）、築島（1960）、柳田（1987）、杉本（1994）などが挙げられる。先行研究によって「あて字」の捉え方や分類は様々であるが、近代の漢字表記に限定して考えると、（現代の視点から見て）「あて字」と捉えられることの多い漢字表記として、以下の2種がある。⁽¹⁾

① 表音タイプのあて字

漢字の字義を用いず、漢字の字音や和訓だけを用いて語の音形を表記する表音表記

例：「丁度」^{ちやうど}「兎角」^{と かく}「目出度」^{め で た く}「矢張」^{や は り}

② 表意タイプのあて字

漢字の字音や和訓の音形を用いず、漢字の字義のみを利用する表意表記

例：「一寸」^{ちやうと}「心算」^{つ も り}「悪戯」^{いたずら}「吃驚」^{びっくり}

上記2種に属する多くの漢字表記が現代までに減少したとみられるが、本研究で焦点

をあてるのは、①の表音タイプのあて字である。なかでも、和語の例を取り上げたい。二字以上の漢字から成り立つ表記については、「仕合せ」のように少なくとも一字が表音的な用法であれば、表音タイプのあて字として考える。また、「左様」のように複合成分に和語が含まれていれば取り上げる。ただし、漢字制限等の影響による同音の書き換え表記、誤字や個人的・臨時的な表記については取り上げない。

従来、あて字の減少については国語施策との関連が指摘されてきたが、実際の減少過程に関する詳細な調査はされていないのが現状である。国家機関による初期のあて字整理案としては、1908（明治41）年に発行された国語調査委員会編『漢字要覧』における第五「本邦仮借字」や、1926（大正15）年5月に臨時国語調査会が発表した「当字の廃棄と外国語の写し方」が挙げられるが、これらは案にとどまっていた。あて字排除の強制力があったとされる国語施策は、1946（昭和21）年に内閣訓令・告示された「当用漢字表」（1850字）であり、「使用上の注意事項」で「あて字は、かな書きにする。」と規定された。ただし、国語施策と表記実態は区別すべきものであり、表音タイプのあて字が減少した時期や要因を特定するには、やはり表記実態を調査する必要がある。

そこで本研究では、新聞記事を資料に用いて、近代における表音タイプのあて字の使用実態に関する経年変化を調査することで、表音タイプのあて字が減少した時期や要因について解明することを目的とする。原科（2022）では、あて字に限らず近代で漢字表記が減少する73の和語を対象に、1900～1950年に発行された新聞3紙を資料として、漢字表記の減少過程を調査した。その結果、文法機能を担う機能語から語彙的な意味の強い内容語へと、段階的にかな表記化したことがデータ上から確認された。今回、調査対象とする漢字表記を、表音タイプのあて字という特殊なものに限定した場合、減少過程にどのような特徴があるのか注目したい。本稿で取り上げるあて字の中には、伝統的に長く慣用されていた用字もあり、当時の人々に「あて字」として認識されていなかった漢字表記も含まれることが想定されるが、今回は意識の問題とは切り離して、表記の機構上、表音タイプのあて字である漢字表記を取り上げて、近代における表記実態の通時的変遷を追うことにする。本研究は、現代日本語表記システムの形成過程を解明することにつながる研究である。

3 新聞3紙を資料としたあて字の減少過程に関する調査

3.1 調査の概要

調査資料は、近代で長期にわたって発行された、『東京日日新聞』（1943年1月1日の大阪毎日新聞との統合以後は『毎日新聞』東京本社版）・『東京朝日新聞』（1940年9月1日の大阪朝日新聞との統合以後は『朝日新聞』東京本社版）・『読売新聞』の3紙である。この3紙は、原科（2022）と同一の資料である。新聞は、特定の基準による校閲で表記が統一される可能性があるため、必ずしもそれぞれの時代における多様な表記実態

を見るうえでは向いていない恐れがあるが、同じ性質の資料が長期にわたって発行されているという点で、歴史的変遷を追う研究に向いているとも考えられる。なお、本調査では全てオンライン上で紙面を閲覧した。利用したデータベースは、本稿末尾に示した通りである。

用例収集は、大きく二段階に分けておこなった。第一段階として、1900（明治33）～1950（昭和25）年までを10年おきに、7月1日から7月5日（1950年のみ7月1日から7月10日）の朝刊記事⁽³⁾において、現代で一般的に使用されない表音タイプのあて字が出現したら、その表記を用例として収集した。明治初期の新聞は2つの系列に分かれており、『東京日日新聞』は知識人向けで政論中心の大新聞、『東京朝日新聞』と『読売新聞』は庶民向けで雑報記事中心の小新聞であったが、1900年以降であれば、大新聞と小新聞が合流した後の安定した時期であるため、両者の差異を考慮せずに分析することができる⁽⁴⁾。1950年までを調査する理由は、「当用漢字表」（1946年）の制定後であり、近代で定着していた表音タイプのあて字の多くが、新聞記事上で減少した後と推定されるからである。

第二段階として、かな表記や他の漢字表記との比率に関する経年変化を分析するため、第一段階で収集された表音タイプのあて字のうち、調査範囲内で3件以上の記事で用いられていて、文語体・口語体ともに広く用いられる語を調査対象語として選定した（調査対象語は2.2を参照⁽⁵⁾）。そして、調査対象語について、第一段階と同一の調査範囲内で、表音タイプのあて字以外の表記も用例として収集した。なお、分析の際に記事数で集計するため、用例収集の際、同一語の同一表記が記事内で複数出現した場合は、1つの表記を収集すればよいこととした。

文体に関しては、1900～1920年で文語体と口語体の記事が混在していたが、1930年以降で口語体の記事が基本となった⁽⁶⁾。調査対象年の7月におけるルビシステムの状況は、基本的⁽⁷⁾に表1の通りである。

表1 各新聞・各年におけるルビシステムの状況

	1900年	1910年	1920年	1930年	1940年	1950年
東京日日・毎日	パラルビ ／ルビなし	総ルビ 中心	総ルビ 中心	総ルビ 中心	総ルビ 中心	ルビなし
東京朝日・朝日	総ルビ 中心					
読売						

3.2 調査対象語

表音タイプのあて字という同じカテゴリーに属する漢字表記のなかでも、表記される語に、他に代わりとなる漢字表記が定着しているかどうかによって、減少過程に違いがあるとみられた。そこで、調査範囲内において、表音タイプのあて字しか漢字表記が定着していなかった語をA類、表音タイプのあて字だけでなく字義と語義が対応する他の漢字表記も定着していた語をB類として分析する。具体的な基準としては、表音タイプのあて字以外の漢字表記が異なる書き手とみられる3件以上の記事で出現した語をB類とし、その他をA類とした。⁽⁸⁾1900年で収集された異なり語数は56語であるが、調査対象語は表2に示した31語である。B類の【 】内に、表音タイプのあて字以外の漢字表記を示した。漢字は常用漢字体とし、表音タイプのあて字のうち語源説に沿った字はゴシック体にした。

表2 調査対象語一覧

	A 類	B 類
名詞	甲斐 ^{かい} ／仕合せ ^{しあわせ} ／仕舞 ^{しまい} ／出鱈目 ^{でたらめ} ／無暗 ^{むやみ} ／減茶 ^{めちやくちや} 苦茶	—
動詞	胡麻化 ^{ごまか} す／胡魔化 ^{ごまか} す／呉れる ^く	—
形容詞	覚束 ^{おぼつか} ない／目出度 ^{めでたく} ・芽出度 ^{めでたく} ／由々敷 ^{ゆゆしき}	むづかしく六ヶ敷【難】 ^や ／八釜 ^{かま} しい・八ヶ間敷 ^や 【喧】 ^{かましき}
副詞	屹度 ^{きつと} ／左程 ^{さほど} ／丁度 ^{ちやうど} ・恰度 ^{ちやうど} ／兎角 ^{とかく} ／兎 ^と に角 ^{かく} ／兎も角 ^と ／減切り ^{めつき} ／矢鱈 ^{やたら} ／矢張 ^{やはり}	ちよっと鳥渡【一寸】 ^{かね} ／兼て【豫】 ^{かなり} ／可成【可也・可なり】
補助動詞	～兼ねる ^か ／～て呉れる ^く	～て仕舞う ^{しま} 【終・了・畢】
助詞・助動詞	ども ^{ども} ／共 ^{そう} ／～相だ ^た ／～度い	—

3.3 調査結果・全体およびA類とB類の傾向

調査の第二段階までに収集された調査対象語の記事数全体について、表音タイプのあて字・（表音タイプのあて字ではない）他の漢字表記・かな表記の比率に関する経年変化を図1にまとめた。以下、本稿で図中の数字はすべて記事数である。図1を見ると、表音タイプのあて字は、1930年以後で減少傾向にあったことがわかる。

また、調査対象語の記事数全体をA類とB類に分けたうえで、各表記の比率に関する経年変化をそれぞれ図2と図3に示した。これらの図を比較すると、表音タイプのあて字しか漢字表記が定着していなかったA類の語（図2）よりも、表音タイプのあて字以外にも漢字表記が定着していたB類の語（図3）のほうが、表音タイプのあて字の衰退する時期は早い傾向にあったことが見て取れる。B類は、1940年の時点で、表音タイプ

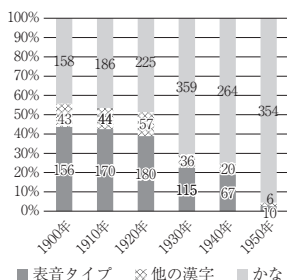


図1 調査対象語全体の傾向

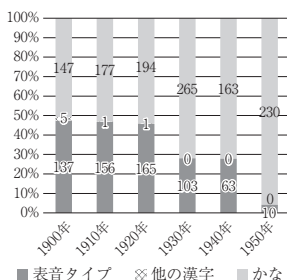


図2 A類の表記

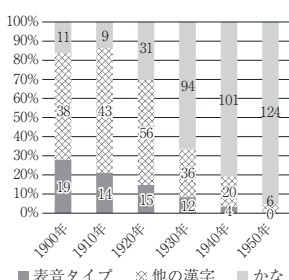


図3 B類の表記

のあて字が1割以下と極めて低い比率になっていた。

3.4 調査結果・語ごとの分析

ここからは、語ごとに表音タイプのあて字の減少過程を分析する。調査対象語のうち、調査対象とした各年ですべての表記を含め5例以上の用例が収集された計12語について、各表記の比率の経年変化を図4～15に示した。名詞・動詞・形容詞の用例は十分に収集されなかったが、そのなかでも表音タイプのあて字の減少スピードには、文法機能を担う機能語か、語彙的な意味の強い内容語に近い語かといった、語の細かい性質の違いが一部に関与すると考えられたため、機能語から順に調査結果を見ていきたい。

(1) 機能語

A類である、助動詞タイ・タシ⁽¹⁰⁾（図4）、助動詞ソウダ⁽¹¹⁾（図5）、接続助詞ドモ⁽¹²⁾（図6）といった機能語は、1900～1950年を通して、かな表記されやすく、表音タイプのあて字が2割以下と低い比率であるという点で共通している。

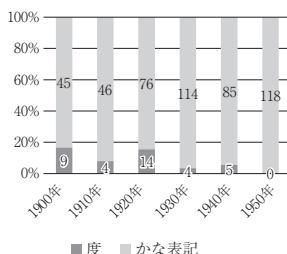


図4 助動詞タイ・タシの表記

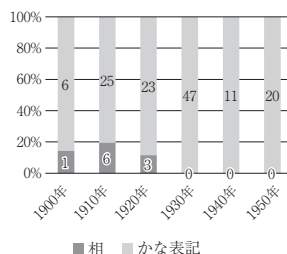


図5 助動詞ソウダの表記

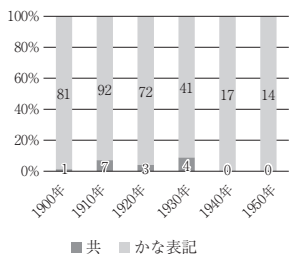


図6 接続助詞ドモの表記

(2) 機能語以外

A類の補助動詞テクレル⁽¹³⁾（図7）や補助動詞カネル（図8）は、1900～1920年で表音タイプのあて字の比率が6割以上を占めていたが、1940年の時点では漢字表記の比率

が低下した。B類の補助動詞テシマウ（図9）は、他の漢字表記も定着していた分、表音タイプのあて字「仕舞」の比率がさらに早い時期に低下し、1920年以降で1割以下となっていた。

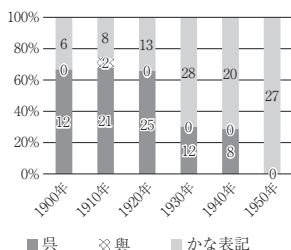


図7 補助動詞テクレルの表記

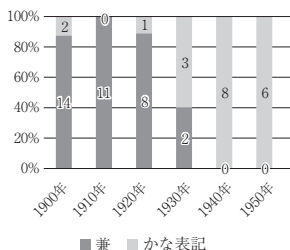


図8 補助動詞カネルの表記

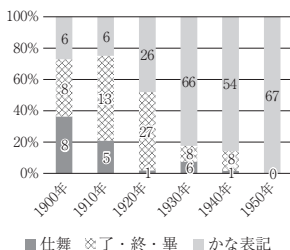


図9 補助動詞テシマウの表記

A類の副詞ヤハリ⁽¹⁴⁾（図10）、トニカク（図11）、トモカク（図12）、トカク（図13）、チョウド（図14）については、1930年や1940年の時点でも表音タイプのあて字が一定数用いられており、衰退が比較的遅い。チョウド（図14）の場合は、1950年の時点でも表音タイプのあて字「丁度」が複数の記事内で用いられていた。ただし、他の漢字表記も定着していたB類の副詞カネテ（図15）は、表音タイプのあて字「兼て」が1930年以降で収集されず、衰退が早かったとみられる。

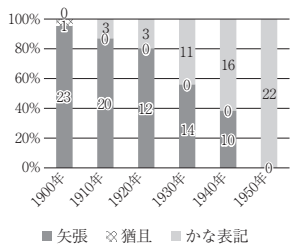


図10 副詞ヤハリの表記

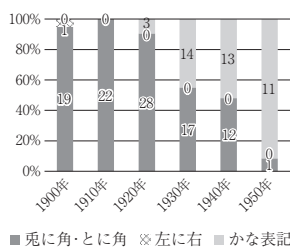


図11 副詞トニカクの表記

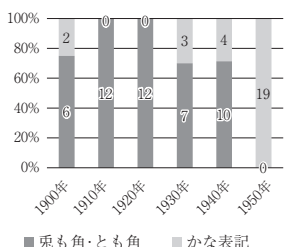


図12 副詞トモカクの表記

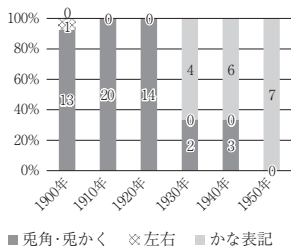


図13 副詞トカクの表記

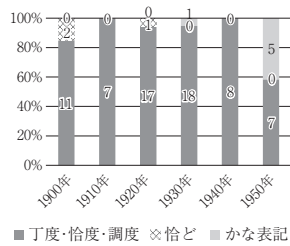


図14 副詞チョウドの表記

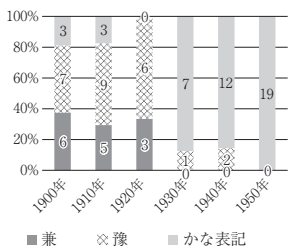


図15 副詞カネテの表記

4 表音タイプのあて字における2種

ここまで、近代で発行された新聞3紙を資料とし、表音タイプのあて字が減少した過程について、他の表記との比率における経年変化を分析した。その結果、「当用漢字表」（1946年）であて字排除が規定される前の1940年以前で、すでに全体として減少傾向にあったことが明らかになった。

さらに、表音タイプのあて字の中でも、A類の語とB類の語では、減少過程に異なる動きが見られた。表音タイプのあて字の減少過程においては、表記される語に、表音タイプのあて字の他に代わりとなる漢字表記が定着しているかどうかの影響するということである。

表音タイプのあて字以外にも漢字表記が定着していた語（B類）の場合、表音タイプのあて字は、品詞にかかわらず早く減少する傾向にあり、1940年で衰滅に近かったとみられる。「兼て」「鳥渡」「六ヶ敷」「八釜しい」「八ヶ間敷」といったB類の表音タイプのあて字は、1940年以降で収集されなかった。また、語義と字義が対応する他の漢字表記のほうが残しやすい傾向にあるが、補助動詞テシマウ（図9）や副詞カネテ（図15）のように、昭和戦後までにすべての漢字表記が残らず、かな表記が基本となる場合もあった。B類の表音タイプのあて字は、早期に減少するという点で、あて字としての特殊な性質が強く出ているものといえる。

一方、表音タイプのあて字しか漢字表記が定着していなかった語（A類）の場合、すべての表記の中で、表音タイプのあて字の占める比率が低下する時期は、機能語で早く内容語で遅い傾向がみられた。図10～14で確認したように、A類の内容語では、漢字の字義と字音・和訓をとともに利用する表記と同様に、1940年の時点でも表音タイプのあて字が使用され続けていたのである。今回、表音タイプのあて字という特殊な漢字表記を取り上げて減少過程を調査したにもかかわらず、A類の場合は、漢字の字義と字音・和訓をとともに利用する漢字表記も含めて和語の漢字表記の減少過程を調査した、原科（2022）と類似する結果となった。名詞・動詞・形容詞の用例数が十分に収集されなかったが、現代でも「試合」「仕事」「支払う」等の動詞のシや、「派手」「滅多に」「面倒」「馬鹿」といった表音タイプのあて字が使用されていることを考慮すると、やはりA類の内容語では表音タイプのあて字が残しやすいと考えられる。

5 表音タイプのあて字が減少した背景

表音タイプのあて字が1940年以前ですでに減少傾向にあったということは、その減少の要因は「当用漢字表」（1946年）以外にあるといえる。それでは、今回の調査結果をふまえたうえで、近代における表音タイプのあて字の減少と関連する可能性のある事象について確認していきたい。

近代では、漢字の数や種類を減らそうとする「漢字節減論」が唱えられる風潮があり、そのなかで新聞社では、印刷能率の向上などの理由から、漢字の使用を一定の範囲内に制限しようとする、漢字制限の動きが見られた。調査対象とした3紙が漢字制限の実施に向けて動き出したのは、特に大正後期以降である。1923（大正12）年5月に、臨時国語調査会が「常用漢字表」（1962字）を官報に発表したことに伴い、3紙を含む東京の新聞社は同年9月1日に「常用漢字表」に基づく紙面整理を実行しようとしたが、関東大震災の影響で失敗した。その後、1925（大正14）年には、3紙を含む全国の主要な新聞社で、漢字制限を実施したとされている。同年に発行された東京日日新聞編「改訂漢字制限字引」の原則の第二項には、「国語に無理にあてはめられた漢字は、出来るだけさけて下さい」という記述とともに、「穴穿」「穴勝」「強ち」「噫勝」の類は「あながち」にするように⁽¹⁶⁾との例が挙げられており、あて字を控えるよう促している。また、1928（昭和3）年に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が共同で発行した『校正の研究』では、「あて字は、すべて仮名書きにすること」（p. 336）との記述があり、「六ヶしい」（むつかしい）「四六四九」（よろしく）「穴賢」（あなかしこ）「八（矢）釜しい」（やかましい）「目出度い」（めでたい）「矢鱈」（やたら）「浅墓」（あさはか）や、助動詞「度い」（たい）などの表音タイプのあて字が例として挙げられている。このように新聞社内であて字を減らすべきだとの意見が上がっていたことが確認されたが、昭和戦前に行われた漢字制限はそれほど強大な影響力を持たなかったと考えられ、その他の要因も考える必要がある。

新聞社だけでなく、近代、特に明治後期以降に確立された国語教育でも、表音タイプのあて字を排除する方向性が見られる。1872（明治5）年に「学制」が發布されてから明治30年代半ばまでは、かなり多種多様な国語教科書が用いられていたため、あて字の使用状況を含め、表記傾向は教科書ごとに異なっていた。その後、1903（明治36）年の「小学校令」改正により国定教科書制度が実施されることになると、1904（明治37）年4月から順次、使用される国語読本が全国で統一されていった。第1期～第6期までの国定国語読本について、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス（CHJ）」を使用し、新聞3紙のあて字調査の第一段階で収集された語の表記を確認したところ、現代で一般的でない表音タイプのあて字は、候文中の用例を除けば、名詞のシアワセを「仕合」で表記する例（12例）や、助動詞のタイに「度」の字をあてる例（2例）が見受けられる程度にとどまる。さらに、1907（明治40）年の「小学校令」改正により、翌年4月から、それまで4年であった義務教育年限が6年へと延長された。表音タイプのあて字の使用が少ない国定国語読本が全国で使用され、義務教育年限が延長されて漢字を学習する期間が長くなったことは、新聞3紙の調査と直接結びつけることは慎重になるべきであるが、社会全体における表音タイプのあて字の減少と関わりがあると考えられる。

また、文語体から口語体へと移り変わり、使用される語彙が変化したことも、表音タ

イブのあて字の減少に大きく関わっていたといえる。今回の調査では、「左れど・去れど」(されど)「去りながら」(さりながら)「玉ふ」(たまふ)「床し」(ゆかし)など、語自体が衰退したために、第二段階の調査対象語から外れたものが多数存在した。1926(大正15)年に臨時国語調査会が発表した「当字の廃棄と外国語の写し方」でかな書きが良いとされた65語においても、「穴賢」(あなかしこ)「薄野呂」(うすのろ)「得共」(えども)「得者」(えば)「剣呑」(けんのん)「頓痴氣」(とんちき)「頓間」(とんま)「間敷」(まじく)など、現代であまり使用されない表現が目立つ⁽¹⁷⁾。もちろん、表音タイプのあて字で表記されていたものが他の表記に移行するという表記傾向の変化ではないが、表音タイプのあて字で表記される語の衰退とともに、表音タイプのあて字の数が減少したのも確かである。

6 おわりに

近代の新聞3紙を資料とし、表音タイプのあて字が減少する過程について調査した結果、表音タイプのあて字は、「当用漢字表」(1946年)であて字排除が規定される前の1940年以前で、すでに全体として減少傾向にあったことが判明した。

そして、表音タイプのあて字のなかでも、他に代わりとなる漢字表記が定着しているかどうかによって、減少過程に違いが見られた。表音タイプのあて字だけでなく、字義と語義が対応する漢字表記も定着していた語(B類)では、品詞にかかわらず表音タイプのあて字が早期に衰退へ向かう傾向にあった。一方、表音タイプのあて字しか漢字表記が定着していなかった語(A類)の場合、表音タイプのあて字が衰退に至る時期は、機能語で早く内容語で遅い傾向にある。なかでも、A類の副詞などでは、漢字の字義と字音・和訓をとともに利用する漢字表記と同様に、長く使用され続けていたことが明らかになった。

昭和戦前において表音タイプのあて字が減少した背景では、新聞社や国家機関で漢字の数や種類を減らそうとする動きがあったほか、明治後期以降の国語教育が表音タイプのあて字を排除する方向に進んでいた。また、文語体から口語体への変化とともに、表音タイプのあて字で表記されていた語自体が多く衰退したことも、あて字が使用されにくくなった要因の一つであると考えられる。

今回は、長期にわたって刊行され、当時の世間一般でよく読まれた新聞記事を用いて調査したが、校閲によって表記が統一されうるという点では特殊な資料といえる。雑誌や教科書など他の資料でもあて字の使用状況の経年変化を調査して、異なる資料ジャンル間における表記実態を比較することも重要であろう。また、近代で多くのあて字が減少した一方で、現在の「常用漢字表」の「付表」に掲載されているような、いわゆる熟字訓といった表意タイプのあて字の一種を中心に、今もなお使用され続けているあて字が存在する。今後は、表意タイプのあて字も取り扱い、調査範囲とする年代も広げて、

あて字の一部が現代に残存した理由まで検討する必要がある。

【注】

- (1) ①と②は、さらに細分化することもできる。また、近代では「型録」(カタログ)「倶楽部」(クラブ)のように①と②にまたがるような漢字表記も使用されることがあった。
- (2) 「当字の廃棄と外国語の写し方」は、大正第4113号付録(大正15年5月12日)を参照。ここで挙げた2つのあて字整理案は、木村(1994)で詳しく取り上げられている。
- (3) 夕刊のない時期もあり、各紙・各年でページ数が異なる。1950年7月の朝刊は全2～4頁となっており、他の調査対象年に比べて極端に少ないため、10日分収集することとした。漢文や候文、詩や俳句などの歌、引用と考えられる箇所、広告、印刷が薄いなどの理由で判読できない箇所は用例収集の対象外とした。
- (4) 西田(1966)によれば、日清戦争後は大・小新聞の区別が全く消滅していたという。
- (5) 様々な語に付く要素(形容詞シク活用語尾の「敷」や動詞の「仕」など)は今回、調査対象外とした。
- (6) 1900～1920年で、政治・経済面は文語体が基本であるが、文化面や社会面などは口語体のことがある。
- (7) 屋名池(2009)における「総ルビシステム」と「バラルビ／ルビなしシステム」を基本としたが、1950年では完全にルビがないため「ルビなし」とした。本調査で1920年以降は、各紙のルビが減少していった。
- (8) 表音タイプのあて字として、「浅間しい」(あさましい)「苦茶苦茶」(くちゃくちゃ)「呉々」(くれぐれ)「薩張り」(さっぱり)「鹿爪らしい」(しかつめらしい)「頼母しい」(たのもしい)「野呂間」(のろま)「魔胡々々」(まごまご)「升」(ます)「満更」(まんざら)「見世」(みせ)「腕白」(わんぱく)などの表記も収集されたが、調査範囲内で2例以下であった。「丈け」(だけ)「計り」(ばかり)「一勝ち」(がち)「成程」(なるほど)など、表音的なあて字と捉えられることもあるが、語源説に合っているものは除外した。
- (9) 図中の記事数を合計しても、閲覧した記事数の合計にはならない。同じ記事内で同一語の異なる表記が出現した場合は、それぞれの表記を1件として集計したが、そのような例は少数である。
- (10) タイ・タシ・タク・タキという語形のみ集計した。タシは文語体の終止形である。「度」の字音と完全に一致するのはタクという語形のみだが、タクという語形だけで調査結果をまとめた場合でも、かな表記されやすいという傾向は図4と同じである。調査対象としたすべての年を合計してタクという語形は41件の記事で収集されたが、そのうち表音タイプのあて字「度」を使用している記事はわずか3件であった。
- (11) 伝聞の用法のみ集計した。
- (12) イエドモは「雖」という漢字表記があるため集計から除いた。
- (13) テクレ・テクレルの語形のみ集計し、変化した形であるテクンなどは集計から除いた。
- (14) ヤハリという語形のみ集計し、変化した形であるヤッパリは集計から除いた。
- (15) 1925年6月1日、東京朝日・東京日日・読売を含む計10社が、臨時国語調査会の「常用漢字表」(1923年5月「官報」に発表されたもの)をもとにした2108字からなる漢字制限を行う旨の共同宣言を発表した。
- (16) 大阪毎日新聞社校正部編(1928)に掲載されているものを引用した。
- (17) 「得共」「得者」は候文中で用いられた表現である。明治・大正期では近世に引き続き、書簡文を候文で書くことがあった。

【参考文献】

伊藤正徳(1943)『新聞五十年史』鱗書房

- 井上敏夫（1958）「国語教科書の変遷」『国語教育科学講座第5巻 国語教材研究論』全国大学国語教育学会編 明治図書 pp. 9-78
- 井之口有一（1982）『明治以後の漢字政策』日本学術振興会
- 大阪毎日新聞社校正部編（1928）『校正の研究』大阪毎日新聞社・東京日日新聞社
- 小野秀雄（1922）『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社・東京日日新聞社
- 海後宗臣・仲新・寺崎昌男（1999）『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍
- 海後宗臣（1996）『図説教科書の歴史』日本図書センター
- 木村義之（1994）「近代のあて字と文学」『日本語学』13巻4号 pp. 57-70
- 木村義之（2005）「あて字」『朝倉漢字講座1 漢字と日本語』朝倉書店 pp. 80-125
- 今野真二（2014）『日本語の近代——はずされた漢語』筑摩書房
- 笹原宏之（2010）『当て字・当て読み漢字表現辞典』三省堂
- 小学館（2000～2002）『日本国語大辞典 第二版』（Japan Knowledge Lib で閲覧）
- 杉本つとむ（1994）『《あて字》概説』『あて字用例辞典』雄山閣出版 pp. 472-487
- 田島優（2017）『「あて字」の日本語史』風媒社
- 築島裕（1960）「宛字考」『言語生活』106号 筑摩書房 pp. 46-53
- 西田長寿（1966）『明治時代の新聞と雑誌』至文堂
- 原科有里（2022）「新聞における漢字表記の減少過程——明治から昭和戦後まで」『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）123-1号 pp. 143 (86)-160 (69)
- 古田東朔（1978）『小学読本便覧 第一巻』武蔵野書院
- 文化庁（2006）『国語施策百年史』ぎょうせい
- 峰岸明（1980）「あて字」『国語学大辞典』東京堂出版 pp. 16-18
- 文部省（1972）『学制百年史』帝国地方行政学会
- 屋名池誠（2009）「『総ルビ』の時代——日本語表記の十九世紀」『文学』10巻6号 pp. 117-130
- 柳田征司（1987）「あて字」『漢字講座3 漢字と日本語』明治書院 pp. 235-253
- 山田忠雄（1955）「あて字」『国語学辞典』東京堂 pp. 13-14
- 山本武利（1981）『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局

【資料】

国語調査委員会（1908）『漢字要覧』〔人間文化研究機構国立国語研究所所蔵：W52-2/Ko47、「日本語史研究資料」としてオンライン上で公開されているものを閲覧〕

【使用データベース】

朝日新聞データベース「朝日新聞クロスサーチ」（最終閲覧期間：2024年5月）

<https://xsearch.asahi.com/>

毎日新聞データベース「毎索」（最終閲覧期間：2024年5月）

<https://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>

読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」（最終閲覧期間：2024年5月）

<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>

（はらしな・ゆり）